

「森銑三刈谷の会」だより 35(2024/9/21)

発行 2024/9/21 (月刊・メールでの投稿歓迎)

例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会

共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp

35:2024/8/17(土) 正木敦子・神谷磨利子「金子民雄(1936-)への書簡から探る森銑三と掃苔会」

参加 : 13 人

金子先生との交遊について

正木敦子

金子先生と初めてお会いしたのは、朝日旅行の講師付きの旅でした。もう 30 年以上前になりますが、中央アジア草原のシルクロードでした。その時同行の志と仲良くなり金子グループとして旅を続ける事となり、チベットのカイラス山やブータンへと出かける度に親しさが増し、先生の自宅へお訪ねするようになりました。たくさんの資料や本に囲まれた先生のお部屋で聞く話は、本当に楽しく興味のわく事ばかりで何度もお訪ねする内に、神田の古本街や博物館、昭和公園や高尾山とご案内下さり、海外旅行もギリシャのテサロニキに旅した時、アレキサンダー大王の東征の道をたどっている事に気付き大感激をした事もありました。

森銑三さんの話はその中で出た事で、あまり詳しくお聞きする事が無かったのは申し訳なかったと思っています。宮沢賢治の事も先生はとても熱心に語っておいででしたが、私の方に熱が無かったため、あまり深い話を覚えていなくて申し訳ないことをしたと思っています。先生も御高齢になられて、お電話では十分なお話がお聞きできません。もっとお話を伺いたかったのですが、残念なことをしました。

森銑三自筆葉書

神谷磨利子

森銑三さんから金子民雄氏宛の自筆書簡を正木敦子さんに見せていただいたのは、今から 8 年前の 2016 年 9 月のことであった。金子氏は正木さんのシルクロードの旅の先生だそうである。1968/11/21 (銑三 73 歳、金子 32 歳) から銑三逝去の半年前 1984/9/10 までの 57 通の書簡である。書簡は細く薄い字で書かれた歴史的仮名遣いの候文である。読み慣れてくると、金子氏から贈られた著書の『ヘディン伝』や雑誌『賢治地理』などについて、銑三が丁寧に読了の感想を送っていること、金子氏から銑三の新著(西鶴本も含む)への感想があったこと、1977 年 2 月の読売文学賞受賞の折りにすぐに祝電があったことも分かった。金子氏の律儀な

お人柄が伝わってきた。

今回は銑三から金子氏に「掃苔会」での話を依頼する一連の葉書 7 通を読み合わせた。先ず 1975 年 4 月 2 日に「私が講師をきめることに、いつの間になつてしまひ」と事情を説明し、12 月 18 日にも重ねて打診をしている。翌年 3 月に金子氏に掃苔会に参加してもらい、4 月 4 日、12 日の葉書で 6 月の掃苔会に宮沢賢治の話を一時間たっぷりしてもらおうと打ち合わせを重ねている。6 月 1 日には 24 日の掃苔会の件につき、「何とぞよろしく御願申上候」と丁寧な確認、さらに 13 日にも当日の話の内容についてのお願いを重ね、いよいよ当日が過ぎ、28 日には話の内容から「賢治その人に好感が持たれます」とお礼を述べている。講話を依頼した金子氏に対する銑三の丁寧な態度に心打たれる。

8/17 日、当日の資料に付しておいた銑三「大東亜会館の夜」(『掃苔』1943 年 2 月号)には藤浪剛一博士が自ら銑三を訪ねて来て掃苔会での話を依頼したこと、『掃苔』に文章が載ると几帳面に毎回、巻紙に毛筆で認めた挨拶があったことなどが書かれている。博士が年の離れた人にも親切で、懇篤で、謙虚であったとあり、それは銑三が若い金子氏に対してお願いをするときの態度そのものである。尊敬する先輩のされたことを銑三もまた踏襲している。

正木さんと金子氏、正木さんと森家という二つの縁がもたらした貴重な資料を拝見させていただいた正木さんに感謝し、いずれ書簡の全文を明らかに出来ると良いと思っている。

年は離れても同好の士の銑三さん・金子さん

長嶋秀雄

日本大学商学部卒で、自分の興味のあることに突き進み、沢山の本を出してみえる金子民雄氏と一緒に旅をされた正木さんを羨ましく思いました。

銑三さんも金子さんの追及する姿勢に、40 歳も年が離れても研究者として認め、金子さんも著名な先達として尊敬し、互いに同好の士という思いが通じていたような感想を持ちました。金子氏の活動を詳しく知りたくなりました。

シルクロード、ボロボドール、宮沢賢治と私の琴線に触れることばかりですから。

掃苔会[編](1985)『森先生追悼録』

鈴木哲

「掃苔会」は森銑三「真の学者」言説を伝えた会である。1970/5 掃苔会で相磯凌霜が永井荷風が森を「本当の学者」と評した話をしている（「永井荷風が森銑三を『真の学者』と呼んだ日」『かりや』45(2024):59-66）。言説を相磯に語ったのは「断腸亭日乗」から1944/10/6と考えられる。掃苔会[編](1985)『森先生追悼録』秋邦閣明石書房が刈谷市中央図書館に架蔵されている。会員の追悼文である(金子民雄寄稿はない)が、銑三とないため知る人は少ない。「掃苔」「森銑三」は現行『広辞苑』7版(2018)にあるが、3版(1993)にはない(森の場合は理由がある)。森自筆葉書が金子-正木-神谷と伝えられ、読むことができるのは刈谷なればこそである。

後援依頼者への気遣いが伝わる銑三の書簡

飯田芳子

森銑三から金子民雄への書簡7葉(1975/4~1976/6)から、森銑三が掃苔会において講演依頼をする専任であったこと、依頼者に対しての気づかいが伝わる内容(6/13、6/28)、別な書簡からはお互いの分野への理解などが伝わる。用意された資料がこの書簡の内容を膨らませ濃い内容を提供しており一入の感慨を覚えた。この書簡が金子民雄氏から正木敦子さんへそして神谷磨利子さんへと渡りここに一本の橋となって導かれたことに人の縁の不思議さを思い、濃密な時間を味わうことができた。

貴重な写真をありがとうございました

岡部美由紀

正木様、貴重な写真を見せてくださりありがとうございました。郷土を学ぶ会でスライドの発表をされたことを思い出しました。磨崖仏など目を見張りました。

写真や著書からも浮かぶ興味深いお話

神谷美恵子

正木さんが写真や金子先生の著書を見せてくださり、興味深い話でした。銑三さんの交友の広さがうかがわれます。人はどこかでつながっているんですね。

頭が下がる2年をかけたの交渉

神谷明子

銑三さんと金子民雄さんとの手紙のやりとりは今と違って時間をたっぷりかけて1時間のお話をお願いされておられることに相手を立てるといふか礼を尽くされているように思いました。候文も声に出すと礼を尽くされていると感じました。2年をかけたのお願いに頭が下がります。今なら電話やメールですぐ返事がもらえる。味気無い。どちらが良い!? でも2年をかけたの交渉の間に

互いを知ることができるから、お会いした時には感謝すると思います。私も手紙は好きです。書いた物は文字間、行間、文字の姿などから想像する事ができるから楽しい。燃やさなければ残ります。また読み返すのも楽しいことです。

森兄弟の作品、生涯を学ぶことは・・・

子安重晃

やはり、森銑三・三郎兄弟の作品、生涯を皆様の英知という、フィルターで不易流行を学ぶことは、適切なプロセスと思いました。先回の復習の具体例「子守教育」は現代のどの組織にも共通の課題です。

「掃苔」とは

当日、「掃苔」とは何かという確認の質問に対し、長嶋さんから説明があった。

苔むした墓の表面をきれいにし、その下に現れた墓碑銘を拓本などの方法で調べ、その人の履歴・業績などを読み取ることである。誰が文章を作り、誰が文字を書いたかなどに関心が寄せられる。それを掃苔会で発表し、会誌『掃苔』に掲載していた。

中日新聞「中日春秋」2024/8/18

8月の定例会の翌日、中日新聞「中日春秋」に森銑三『明治東京逸聞史』からの引用が載っていた。Dykesさん、河橋さん、神谷美恵子さんから連絡があった。『明治東京逸聞史』は銑三が雑誌新聞から興味ある話を拾い出して当時の東京の世相を年代順にまとめたものの。「金十銭以下の避暑法」として「早朝不忍の池の蓮の花を見、・・・帰路上野公園樹陰で、書を読む」(「朝日新聞」1899/8/4)の部分が引用されていた。まるで銑三自身の体験のようで、皆さんの関心を引いた。

予定

- 36:2024/9/21(土) 鈴木哲・河橋育実「森銑三(1895-1985)と外山滋比古(1923-2020)」
- 37:2024/10/19(土) 村瀬典章「刈谷図書館と村上文庫展その2」2階展示コーナー
- 38:2024/11/16(土) 鈴木哲「森銑三の西鶴『一代男』一作説と暉峻(てるおか)康隆(1905-2001)」
〈関連行事〉2024/11/23(土) 13:30-刈谷市郷土文化研究会文化講演会 塩村耕「村上忠順、岩瀬弥助、森銑三」
- 39:2024/12/21(土) 竹中良枝・神谷明子・神谷美恵子「『武玉川選釈』を読む」